

ありえざる 都下市

デイヴィッド・ジンデル／関口幸男〔訳〕



NEVERNESS ありえざる都市 下

デイヴィッド・ジンデル

開口幸里訳

海外SFノベルズ
江戸工業学院図書館

蔵書章

早川書房

NEVERNESS

by David Zindell

Copyright © 1988

by David Zindell

First published 1990 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by arrangement with

John Schaffner Literary Agency

through Japan Uni Agency, Inc., Tokyo.

検 印

廃 止

ありえざる都市〔下〕

1990年11月20日 初版印刷

1990年11月30日 初版発行

著 者 デイヴィッド・ジンデル

訳 者 関^{せき}口^{ぐち}幸^{ゆき}男^お

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(252)3111(大代表)

振替 東京・6-47799

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-202070-9 C0397

Printed and bound in Japan

ありえざる都市

〔下〕

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1990 Hayakawa Publishing, Inc.

目次

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
ケルケメシユ	花々のカリンダ	真実の大海	機械仕掛けの神	プルトニウム の 泉	ハヌマン ニ オーダント の パラドクス	子供の目	クォーラー の 指輪	狂った王の話	タイチヨウ の 予想	アガサンジ
209	191	179	153	134		91	75	59	29	5

116

	30	29	28
解説／山岸真	〈虚無〉	生命の秘密	究極の運命
	280		
299		256	233

17 アガサンジ

死のほとんどは、心のもちようしだいである。

——人類到来の世紀のプログラマー

モリス・ガブリエル・トマス

神がどのようなものであるか、だれにわかるだろう？

人類の人工操作された種族——アニヤの小人族、ホシ人、ニューヴァニアのアルハト人、その他もろもろ——のいずれが神性を獲得しているのか、いずれが不細工な、あるいはときとして端麗な容姿をした、きわめて長生きをする男女なのか、だれにわかるだろう？ 種族が神に値するとみなされるまでにどれほどの叡知を獲得しなければならぬのか？ どれほどの知識を、どれほどの能力を？ そして、最後に不滅を？ エリエイド星団の神王たち——プリムラルズ・ルズのまわりにリングワールドを造っているかれら——これらの人間コンピュータは、単に頭脳明晰な人間でし

かないのか、あるいはもっと深遠ななにかなのか？ ぼくには、わからない。ぼくは、終末論の学問について、その整然とした理論体系や、果てしもない論争についてほとんどなにも知らない。コレニヤ・モルは、本当に重要なのは種族のステイタスではなく、どの方向に進化しているかであると主張している。たとえば、アガサン人は、神への進化の途上にあるのか、あるいは、進化の行き止まりに達しているのか、ということなのだ。アガサンジと呼ばれる謎の惑星に死体でやってきたぼくには、アガサン人の神性の問題を判断する基準はひとつしかない。つまり、こういうことだ。かれらは、この大いなる秘密についてどれだけのことを知っているか？ と。アガサンジの温かい、どこまでもブルーの海を泳いでいるかれらは、生命の秘密と、死にたいする答えをもっているのか？

前にもいったと思うが、（虚無）は、どの惑星のどの都市よりも美しい都市だが、（氷瀑）は、それなりの寒々としたたずまいに美しさがあるものの、すこぶる美しい惑星であるとはいいがたい。アガサンジは、すこぶる美しい惑星だ。深宇宙から望見すると、ダイヤモンドをちりばめた漆黒の鉢に浮かぶ、きらめくブルーと白の寶石とでもいえよう（これはいっておかなければならぬが、ぼくは、よみがえって、この惑星から飛びたって初めて、惑星全体

を垣間見たのだ。むろん、到着時には死んでいたの、なにも見ていない。アガサンジをとりまく星々は、光に満ちあふれている。きらめき、たち騒ぐ波の上から振り上げば、空は、燦然と輝いている。曇った夜に限って、海は黒い。だが、そんなときでも、黒曜石のような黒、あるいは墨のような黒というよりも、むしろ水銀の色と濃青色がかった黒だ。海は——いくつかの小さな島を除いて、惑星全体をおおっているひとつの大海だ——温かく、のどかだ。

魚をはじめ、さまざまな海棲動物に富んでいる。何千万匹、何億匹というタウ魚、コナニが群れをなして浅瀬、浅い海域を泳いでおり、深い海洋には、そのほかの名もない魚を餌食にしている大型のラニタが回遊している。いくつもの熱帯性渦巻、あるいはその空隙を、まったくきずき酔いしれて突き進んでいるのであろうトビウオの、そのあまりにおびたらしい数の群れをなしているため、しばしば何マイルにもわたる海面がふくれあがった銀色の絨毯で揺らいでいるように見えるほどだ。この圧倒されるばかりに豊かな生命形態ゆえに、最初のアガサン人は、自分たちの人間としての身体を人工操作してアザラシのような身体に変えて、ざわめきひとつしていない深海へと逃れ、移り気な小神の子孫で海を満たしたのではあるまいかと、ぼくは思っている。

「たぶん、アガサン人は、神ではなくて神人でしょう」コレニヤ・モルは、後にぼくにいった。「かれらは、個々人の不死を求めているわ。つまり、かれらは、イエルドラ人のように物質にとらわれることから逃れたいとは思っていないし、世界を自分たちの好みに合わせて造り変えようともしていないのよ」かれらは、人類到来の第一波としてアガサンジにやってきたと、彼女はいった。かれらの起源についてのごく一般的な説は——たまたま、これが真相でもあるのだが——こうだ。ずっと昔、つまり大量殺戮の第三閉期に、一群の生態学者が初期の深宇宙船で旧地球を逃れた。その際、イッカク、イルカ、マッコウクジラ、そのほか絶滅した海棲哺乳類の受精卵をクリッドで保存して携行した。そして、豊饒な海洋があり、まったく汚染されていない澄んだ大気に満たされた惑星を発見すると、こうした受精卵を成長させ、サメや、そのほか肉食の海の生き物にたいする恐怖を植えつけながらクジラの赤ん坊を育てた。クジラの赤ん坊が成長し——さらに成長して——船のコンピューターに記憶された、おびたらしい数のクジラの歌を吸収すると、生態学者たちは、クジラの群れを青い海へ放った。クジラたちのいかにも幸せそうな姿を見ると、かれらは有頂天になり、何世紀も古いワインを浴びるほど飲み、かれらが発見してトーラチェと名づけた海藻を喫っ

て、この快挙を祝った。何日か後、かれらは、本来の自分たちをとりもどした。もどかしくもあり、悲しくもあった。自分たちの救ったクジラたちの歓びを、身をもって知ることはできなかつたからだ。生態学者の長は、サルの手をもち、土地の占有欲や、物欲にとりつかれた人間たちが地球をほとんど滅ぼしてしまったのだといった。人類は、姿かたちにも本性にも瑕をもつ、不運な陸生種族だった。だが、その姿かたちと本性とが変わればどうだろう？　そこで、生態学者たちは、トーラチエを吸い、自分たちの生命のありうべきいくつかの形態の幻影を見、自分たちの子供たちを、とがった鼻と足ヒレ、裂片のある尾をもつようにした。かれらは、自分たちの水の世界をアガサンジと呼んだ。アガサンジとは、"すべてのものが究極の善をめざして進むところ"という意味だ。アガサン人は、何千年にもわたって自分の子供たちに人工的に処置をほどこし、育んだ。これが究極の善をめざすものなのか、進化を乱す忌まわしい行為なのか、終末論者にすら判断できない。

ぼくの母は、たぶんみずからの究極の善を求めて（あるいは、単に、ぼくに生をあたえ、ぼくを愛していたからか）、クリッダで保存したぼくの死体をアガサンジに運ぶことにしたのだらう。母は、シャニダーの話をことこまかに知っていた。かつて、神人たちは、シャニダーを甦らせ

た——となれば、われわれの、つとに有名な《社会》のバイロットにも同じことができるのではないか？　母は、パール星団の彼方へと航宙する深宇宙船に乗りこんだ。そして、アガサンジにおもむくと、みずからをへ甦らせる者の集団と称している一群のアガサン人にぼくの死体を託した。母は、この甦らせる者たちが奇跡を成就するまで——あるいは、これに失敗するまで——アガサンジを離れて、この惑星の軌道をめぐる小さなホテルの一カ所で待っているようにと勧められた。

母は、長いあいだ待った。ほぼ二年近く、ぼくの脳のこまかい修復作業が続いた（二年とは、むしろ《虚無》の暦でいっているのだ。アガサンジには季節がひとつしかなく——常春だ——多くのアガサン人が究極の惑星意識への自分たちの進み具合で時間を測っていた。これはともかく、話を先へ進めなければならない）。最初の一年間は、バルシルスタルと、ほかのものがたちが間に合わせの補綴術でぼくの脳のあちこちを再生してくれているあいだ、ぼくは、浮力のある海の中に横たわるようにして浮かんでいたのだ。皮質に植えつけられたこれら粗悪なバイオチップでは、ぼくの心臓、四肢、肺の働きをとりもどすだけのことではしかなかった。こうした極小のコンピュータは、あまりに粗悪で、ぼくの言語機能を大幅に回復させることはで

きなかったし、ぼくのこれまでの人生の大部分を思いださせることもできなかった。スイスイするように泳ぐ黒くなめらかな一千もの身体のあいだで意識をとりもどしたとき、ぼくの脳裏に最初に浮かんだのは、自分が昼の向こう側に来てしまったのであり、ぼくが殺したすべてのアザラシのドッフェルが、なぜぼくが正気でないのかききにやってきたのだという思いだった。

神が造った文明がいずれも、人間には理解できないもの、奇跡だと映るのは古代の予見師が発見したことであり、自明の理だ。となると、ぼくがいまだにこまかいことにいたるまでまったく理解できていないアガサン人の奇跡について、複雑をきわめるかれらの信じがたいまでのテクノロジ―について、どのようにここに書きしるせばよい？　だが、とにかく、ぼくにわかっていることについて話してみよう。ここの海は、造られた有機体に満ちみちている。その三分の一がコンピューター、さらに三分の一がロボット、あと三分の一が生き物だ。こうした小さな道具は、ほとんどが顕微鏡的な大きさしかない。ありとあらゆる大きさと形をしたバクテリアがいた。真正細菌、球菌、鞭のような尾をもったスピロヘータ。これが人工増殖された植物プランクトンのあいだを浮遊している。海中には鞭毛、単細胞および群体の藻類、左右の釣りあいぐもとれた珪藻類、

ケイ酸塩や炭素繊維を紡ぎだす海の小さな宝石、あるいはそのほかのなんであるにせよ、こうした生物や植物、物質、その他、造りだすべく意図されたものが豊富に分布していた。だが、アガサン人がとりわけ腐心していたのは、蛋白質の操作だった。海全体が、蛋白質を作り、分解し、また造りなおすシチュー鍋のようなものだった。これは、古来のテクノロジ―だった。蛋白質製造機にはかならず制限酵素が、バクテリアのDNAの断片を切り、配列を変え、接合するのに使われた。だが、神であるアガサン人は、われわれの〈都市〉のサプライサーたちよりも多くの、DNAの謎を解明していた。かれらは、まったく新しい形態のDNAを造りだしていたのだ。アガサンジの海一帯に分布する人工の生き物の何兆もの細胞内で、DNAが翻訳され、その情報が読みとられてRNAに複製される。そして、RNAは、細胞の天然の分子製造機であるリボゾームに蛋白質を造るよう指示を送るのだ。新酵素、ホルモン、筋肉蛋白質、ヘモグロビン、新バクテリアのごくちっぽけなコンピューター——脳に網の目のように張りめぐらされる神経系、認められるかぎりの形をした、あるいは機能をもったあらゆる蛋白質、可能性としては無限の種類の蛋白質だ。「生命の種類は無限なのよ」ある日バルシルスタルは、ぼくにいったものだ。「人類は、生命についてなにを知って

いるかしら？ ほとんどなにも知っていないといっているほど、ごくわずかだわ、ハ、ハ！ アガサンジでは、バクテリアのあるものですが——ふむ、かれらをバクテリアといつてよいのか、あるいはコンピュータともいえるべきなのかしら？——^{ビラジド}維体バクテリアですが知性をもっているのだから。無限の可能性があるのよ」

ほかの惑星の場合のように、この海には、ケンミジンコやサルバ、環形動物や海綿動物、クラゲが、さらにはイカ、タコ、サメ、そのほか食物連鎖のもっと高い位置にある魚類が豊富に分布している。だが、この海にはほかに、つぶしたり切ったりする機械をつくりの異様な外形をした生き物もいたし、生き物に似た機械もいた。アガサン人は、こうしたものを造った、というか、ぼくにいわせれば、こうしたものを造る組立て役の酵素を造りだしたのだ（これからは、この酵素のことを組立て役と呼ぶことにしよう。実際に、酵素に似た機械だったからだ）。プログラムされたバクテリアのリボゾームは、特殊な仕事をするべく意図された組立て役をせつせと造りだす。そして、こうした組立て役は、海中を自在に泳ぎまわって、炭素やケイ素の断片を、金や銅、ナトリウムの原子を、そしてこの塩辛い、温もりのある海に溶けこんでいるいろんな要素をつかまえては結合して高分子へと造りあげていく。脂質、ホ

ルモン、クロロフィル、新しい形態のDNA——組立て役は、こうしたものを使って半植物、半動物の生き物を造りあげていくのだ。組立て役は、炭素原子をいく層にも重ねて結合し、そして、海の精たちがダイヤの繊維を紡いで自分たちの、きらめきを発する美しいしとねをつくるのだ。

組立て役は、原子と原子をつなぎ、ビー玉をにかわで接合するように結合するのだ。アガサン人は、原子を組み合わせて、自然の法則で許されるかぎりのどんなものでも造ることができたし、造りもした。かれらは、生体組織内で分子の導線を電圧源につなぎ、直接、しかも斬新な方法で電場をつくった。かれらは、もしそう望めば、海底都市を建設することもできていたに違いない。ぼくは、アガサン人が深宇宙船ほども大きなクジラを造ることもできたと信じている。たぶん、クジラの神経系と筋肉に電気回路機構を織りこんで、生きている光子宇宙船を造り、宇宙空間の冷たい流れにのって航行させることもできたのではあるまいか。実際、アガサン人には、人間もふくめて、分子と分子、ノイロンとノイロンをつないで組み合わせたり、分解したり、また組み合わせなおしたりして造れないものはなにとつなかつたのだ。

といったわけで、バルシルスタルをはじめ、ぼくにかかわったアガサン人たちは、ぼくの身体を大気中でも海中で

も呼吸できるように造りなおしたのだった。そして、どうやってか脳を寸断するように操作していつて、ぼくの皮膚が植物プランクトンや環形動物、その他もろもろのいやらしい下等動物におかされずにすむようにしてくれたのだ。さらには、ぼくの気晴らしのために、海底から島を隆起させ、花が咲き、実のなる木々を生やしてくれたのだが、これらのことを数日のうちにやってのけたのだ。それ以外のことは、それほど早く実現させるといふわけにはいかなかった。ぼくの中で、細胞が一度にひとつずつ、一日、また一日と徐々に変化していったのだ。アガサンジにきて一年近くもたったところには、ぼくは、半分を海中で、半分を島で過ごすようになっていた。自分が何者で、なぜひとりぼっちでいるのだろうといふかりながら、小さな島をそぞろ歩いた。木々から酸味の強い果実をもぎとる。ユキリンゴのような味がした。だが、ユキリンゴよりも身体に元気を付けてくれた。実際の話、〈甦らせる者の集団〉は、島の入江を泳いでいる魚よりもずっと栄養価の高いたった一種の食物しか造ってくれなかったのだ。だが、やがて、この果実にも飽きてきた。銀色の魚や、肉、とにかく、びくびく動いたり、泳いだり、歩いたりするものならなんでもよい、そうした生き物が食べたくなかったがなくなってきた。ぼくはむしろ、木の枝で三叉の槍をこしらえてトビウ

オをとり、伸び放題の爪でこれを引き裂いて、塩辛い肉を食べたかった。だが、そうすることを禁じられていたのだ。バルシルスタルは、ぼくの脳が開いている半意識状態のときにししか海に入ってはいけないと、ぼくに釘をさしていた。「あなたには、まだこの海がわかつてはいないわ。あなたがなにを食べてよいかわかつてはいないし、なにがあなたを食べてもよいことになっているかもわかつてはいないのだから」ある日、ぼくがまた空色を認識できるように視覚皮質を操作してくれた後、彼女は、ぼくにいった（バルシルスタルのことを「彼女」といつているが、彼女は、完全な女性というわけではない。だが、アガサン人がほとんどみなそうであるように、彼女は、男性的というよりずっと女性的だったのだ）。ぼくの島の浜辺に、ピョンピョンはねながらあがつてくると、ぼくを見て大笑いした。それがあまりにも激しかったので、彼女の長い胸がぶるぶる震え、きらめく皮膚の下のみごとな脂肪層がさざ波打ったほどだ。彼女は、ヒレに爪をもっていたが、この爪を使って濡れた砂の上にくつかの動物の姿を描いた。バルシルスタルは、アガサン人にしては首がとても長く、しなやかで、これを優雅に振るさまは、揺れ動くウミヘビを彷彿させた。神人——神女——たちがみな同じようではないことに、ここでふれておかなければならない。カイギュウのような外見

をしている者もいれば、イルカやカワウソのようなものもいた。クジラそっくりの者すらいた。彼女らは、自分の子供たちを千差万別の姿へと育てあげていくのだ。だが、そうした違いにもかかわらず、彼女らには、共通の特徴があった。目が人間の目だったのだ。バルシルスタルは、大きな褐色の目をしていた。知的な目、皮肉とユーモアをたたえた目だった。彼女は、咆えたり、うなったり、舌打ちしたりして込み入った言語の言葉でよくに話しかけながら、目はよくに釘づけにしたままでいた。ぼくには、アガサン語が完全に理解できた。後に、ぼくの脳から翻訳用のパイオチップがとりのぞかれてからは、シチメンチョウの鳴き声のようにしか聞こえなかったが。

だが、彼女は、ぼくの人間の言語を知りつくしていた。

「食事は、肉でなくてはね」ぼくは、都市生まれの人間であることをつい忘れて、そういった。「人間は、生きるために肉を狩らなくてはいけないんです」

「あなたは、愚かな人間ね、ハ、ハ、ハ。サメではなく、木々の果実を食べるんです。あの木々は、あなたのものなんだから」

新たな修練士修了者が修練士に優越感をおぼえるのにも似た感じで、バルシルスタルは、ぼくを軽蔑しているようだった。彼女は、このぼくがサルになりでもしたように毎

日、木に登って過ごすとも思っていたのか？ 事情はどうあれ、ぼくがアガサン人の社会を理解しようとしていたことが明らかなのと同様、彼女がぼくを軽蔑していることは明らかだった。「たとえ、あなたの脳が完全であったとしても」バルシルスタルは、いった。「海が語りかけてくるのは、あなたには聞こえないわ。あなたは、自分のために不死を求めている数学の専門家なんだから、ハ、ハ、ハ！ 世界の魂のことなど、わかるはずもないわね」だが、それから、「辛抱するのよ。あなたは、自分を思いだすまで、ただひたすら辛抱していなければならぬ。それから、単純なことがわかるようになるまで、さらにもう少し辛抱していなければならぬのよ」

しばらくして、また自分の筋肉がフルに使えるようになって、ぼくは、思いだしはじめた。ぼく個人の歴史の断片がそっくり、思い浮かんできた。だが、海の泡のようにはかなく、曖昧模糊として、それも一瞬のことで、次の瞬間には、記憶の碎け波に攪拌されて、掻き消えてしまった。

落ち着かない、気味のわるい感覚があった。夜、子供によくあるように、ぼくはときたま、波の上で目覚めた。自分が何者なのか、どうしてこんなところになければならぬのか、なにもわからずに。ぼくは、波に身をまかせてただよいつつ、星々を見あげている。夢を見た。ときどきぼ

くは、自分がブルー代数を学んでいる無垢な修練士のマロリー・リングスだと思った。ぼくは、教師であり、狩人であり、修練士修了者だった。「相棒」、父と息子。ときたま、揺れ動く暗い波の下で恍惚状態におちいつているさま、ぼくは、永遠の海の秘密を突きとめに行ってきたパイロットであり、魚だった——パイロット＝魚だった。

ある日、初めて人を殺し、人に殺されるはめになったときのこと、その中間のときのことをのぞいて自分の人生のあらゆる出来事を思いだしたとき、空いっばいに白いふくらんだ雲がたれこめ、海が穏やかで、波が静まっていたある日、ゆらゆらとただよっているぼくの身体をバルシルスタルが鼻面でつつき、いった。「そろそろ、あなたの脳をきちんと造りなおしてあげるわ。それが終われば、あなたには、脳があるのがわかるはずよ」

彼女は、ぼくの先に立って、〈甦らせる者の集団〉のほかの顔ぶれたちがいる、もっと深いところへおもむいた。アガサン人たちは、ぼくをおしつんだ。百もの冷たい鼻面がぼくの素裸の身体の間とところをつついた。塩辛い泡がぼくの口の中へあふれこんでくる。バクバクバクとツァツァルツァ、ほか大勢の者たちが背にぼくをのせて、つかのま波の上に押しあげた。ぼくの小さな鳥が遠くに揺ら

いで見えた。きらめくブルーの海を背景にした金色と緑の点でしかない。口笛を吹くような声、咆え声、しゃがれ声、甲高い声が聞こえてくる。突然、まわりが、なめらかに水を切る黒い姿また姿で活気づいた。波の下にまた沈む前に、ぼくは、集団の六百三十人まで数えたが、そこで数えるのを中止しなければならなかった（後になって、ぼくは、ひとつの集団にはアガサン人が千人ほどいて、これが一万集団ばかり、この海洋のあちこちに分布していることを知った）。バルシルスタル——あるいは、ムムカシセレカだったかもしれない——が、一連の甲高い叫び声と舌打ち音を発した。イルカやクジラたちに話しかけているのだと、ぼくは思った。まもなく、まわりの海面が巨大な姿また姿で、沸きたちはじめた。「われわれは、あなたの再生の証人に、深海の神々を呼び集めているところなの」バルシルスタルは、いった。ぼくは、頭脳明晰なアガサン人が自分たちの言葉ばかりでなく、クジラの話し言葉やクジラの歌を調音することができるよう舌と音声器官を形づくっていたことにあらためて驚異を感じた。

このあいだじゅう、かれらは、おたがいに触れあい、咆えあっていた。鼻面をこすり合わせて、あるいは言葉で、情報を交換しあっていた。と、急に、いままでにもまして

陽気に、親しげに、しつこく触れあうようになった。そして、海水の沸きたち、渦巻くなかで、集団のある者がほかの者にのつかった。深い愛撫を求めて裂け目を開く。交尾が始まったのだ。ぼくの上で、ぼくの下で、周囲一帯で、多くの者が気分に合わせて奔放に交尾している。やがて、多くの者どころではなくなった——海中に満ちわたる咆え声、呻き声に、ぼくは魅入られたようになって聞き入っていた。最初のうち、なにが起こっているのかわからなかった。神々がセックスにすっかり狂いつてしまったのだと思つた。だが、まもなく、ぼくのなかにひとつの知識があることに気づいた。テレパシーによるものか、あるいは、ぼくの脳に埋めこまれていたバイオチップに、ぼくが知らないままに蓄えられていた情報によるものか、よくわからないが、奇跡の一部がぼくに明らかにされたのだ。海面下にただよって聴き耳をたてているうちに、神の聲がぼくにささやかけてきたのだ。ぼくにわかったかぎりでは、こうだった。集団のひとりのおとなが交尾の用意をととのえようと、彼女、つまり一番目の母は、自分の卵巢のひとつに一個の卵子を造りだす、ということだった。彼女は、パートナーを探しあてると、そこで交尾が始まる（アガサン人は、みな陰茎を、バルドのよりも大きな先端が赤く三角形になった巨根をもっているが、睾丸をもっていない。その

必要がないからだ）。一番目の母は、陰茎を二番目の母の裂け目にさしこむ。すると卵子が、バクラと呼ばれる、とりわけ念入りに造られた器官に送りこまれる。卵子は、このバクラで一部、受精する。二番目の母は、ウイルスが自分の宿る細胞を自分のDNAで感染させるのとまったく同じ要領で、精妙に意匠された生殖質をこの卵子に注ぐのだ。次いで、彼女は、陰茎を通じてこの卵子を三番目のパートナーに引き渡し、そこでまた同じ操作が行なわれる。これが次々と、何度も何度も繰り返されていくのだ。そして、最後に、この卵子がバクラ——アガサン人は、ときとしてこのドーナツ型をした蛋白質製造工場のことを「変化の器官」と称している——からバクラに引き渡されると、すべての母親がこの卵子の生得権にかかわって受精が完了すると、最後の母親がこの受精卵を自分の子宮に受け入れ、ここで胎児が成長する。かくて、アガサン人は、そのひとりひとりが一個の集団の娘ということになるのだ。

「だけど、今日は、娘を造っているのではないわ」海面下で集団の者たちが卵子を次々と引き継いでいるのを見守っているぼくに、バルシルスタルはいった。「ほかのものを造っているのよ、オー、ホ！」

彼女らが造っていたものを、うまくいい表わすのは難しい。アガサン人のバルク内の精は、ある点でバクテ

リア、"ニューロファージ"に似ている。死んで分離したノイロンを食べて、それに入れ替わるよう意匠されているからだ。ほかの点では、情報ウイルスにとってもよく似ている。集団の各母親は、人工操作されたDNAの鎖、小さな結合鎖を情報ウイルスに織りこんだ。母親たちは、海中を泳ぎまわっておたがいに触れあい、恍惚としてよろめきながら、このウイルスをバクラからバクラへと引き渡した。

そして、衝動的な十番目の母親が、ひらめきのままに結合鎖をいくつかつけ加えたが、もっと賢明な五百番目の母親が、これらの結合鎖をとり除き、ほかの結合鎖をいくつかつけ加えた。こうして、ほぼ完成しかけたウイルスをバルシルスタルが自分の子宮に引き継いで、最後の変化を行なったのだ。

「さあ、これからこれをあなたの脳に入れるのよ」彼女は、いった。「わたしの姉妹たちの贈物を受けてちょうだい」

ぼくは、どんな贈物も受けなくなかったと白状しなければならぬ。たとえ完成された自己でなかったとはいえ、ぼくは、恐ろしくて恐ろしくてたまらないことを充分に認識していた。彼女らがどうやってぼくの頭を開いたのか、よくわからない。ぼくの頭蓋骨のコラーゲンをそと裂き、骨を溶かす分解機のようなものを使ったのではないかと思う。身体全体を開かれ、組織という組織を、層という層を、

細胞という細胞を、広げられてでもいるような気がした。

海水が赤く染まり、血が帯状になっていく条も伸びた。ぼくのあちこちの部分が温もりのある塩辛い海中にただよい、ゆっくりと開き、解けた。アガサン人たちは、ぼくの脳からいくつかのバイオチップをとり除いた。そしてそのウイルスを入れたとき、ぼくは、悲鳴をあげた。痛みはなかったが、悲鳴をあげたのだ。そのウイルスがぼくを癒すどころか滅ぼしてしまうのではないかと思ったからだ。悲鳴は、沸きかえる濃い海中を、ずんぐりした頭のマッコウクジラの群れがわれわれを遠巻きにして待っているあたりにまで届いたに違いない。興奮した呻き声が聞こえた。ぼくは、これを笑い声だと解釈した。そのとき、バルシルスタルが口を動かさずに話しかけてきた。ぼくの中で彼女の声があったのだ。

——深海の神たちは、サルが生まれるときにも泣き声をあげるのにはなぜかといぶかっているわ。ハ、ハ、ハ——それは愚かだからと、わたしは、彼女たちにいったけど、——違う、ぼくは、死にかけている。あんたたちは、ぼくを殺そうとしているんだ。

——わたしたちは、あなたがなりうるものに造りなおしてあげているのよ。

——ぼくは、生きるために死ぬのか。このウイルスがぼ